

八年を経過・復興を真剣に考えよう

河辺信雄(OB・G福島の会・副会長)

あの東日本大震災に端を発する大津波、東京電力第一原発の水素爆発をともなつた超過酷事故・災害から八年がすぎた。災害の風化を心配する声がよく聞かれるようになり、復興にも言及され、将来に向かう元気が出てきた証拠と思うと嬉しい限りである。しかし、私はこの復興という言葉に接するたびに、その裏に隠されたモノをしつかり見据えて慎重に考えながら対処していくことの重要性を強く感じている。そのことをおろそかにして、政府、東電をはじめ原発推進者を信じて原発建設を容認した結果が八年前の事故とその後、の苦しみにつながってしまったのである。その反省をこれからの復興に生かし同じ轍を踏まないようにしたいものだ。

いつの時代も財界は儲けを追求し、権力者は平気でウソをつき、最後は力づく(金力も含む)で住民、国民を納得させ思いどおりに事を運ぼうとする。そのことは沖繩の辺野古新基地建設を県民が投票で71.74%がノーを表明したにもかかわらず、それを無視して建設を強行していることと本質は同じだ。

信じられない「アンダーコントロール」

復興に関して同様な兆候はすでに表れはじめている。私が最初にそれを感じたのは六年前のオリピック・パブリック(以下五輪と言う)招致活動の最終段階で、安倍総理がアルゼンチン・ブエノスアイレスで見せたあのパフォーマンスだった。六年前のあの時は福島第一原発事故からまだ二年半しか経っておらず国民全体が不安の中で生活をしていた。そんな国民の気持ちを逆なでした「アンダーコントロール」発言を私は許すことができず、今でも思い出すたびに怒りがわいてくる。権力者というのは目的を達成するためには恥も外聞もなく平気でウソをつくものであることを改めて確信した。

復興と五輪を一緒にして、

「つまかさないで!...国民の声

そのように五輪招致に成功したら、今度は五輪の上に復興の冠をかぶせ「復興五輪」と名付けるパフォーマンス。そのままして神聖な五輪を政治利用したのであるが、国民の目は醒めていて評判はイマイチのようだ。3月11日にテレビ放映をされたアンケート結果がそれを物語っていた。五輪が復興の後押しになるかという設問で実施したパロディーのようなアンケートの結果は第一表のと

おりで、回答者の過半数が復興の後押しにならないと答えた。それに加えて「五輪工事が優先されるため人手不足も関係して復興が遅らされてしまう」という意見が多く出されたようである。いずれにしても2020五輪を政治利用するようなことは避けるべきである。

また一方、県の帰還政策への対応についてのアンケート結果(第二表)も出された。県が住民の意向を無視しているという回答が圧倒的に多かった。今後復興が本格化していく時期だからこそ、住民と行政組織が一体となって取り組むためにも住民の声をしっかりと受け止めて欲しいものである。

復興の課題は山積み・社民党とともに頑張る

今回の投稿は復興について私が日頃考えていたことのほんの一部を披露したが、復興への課題や留意点は山ほどあり、今後復興が本格的に動き出すとなれば、双葉郡や県内といった狭い範囲の対応だけでは済まなくなる。多くの仲間とそして社民党とともに難局に立ち向かっていきましょう。

第一表・五輪が復興の後押しになる

そう思わない	26.1%
あまりそう思わない	31.5%
ややそう思う	11.5%
そう思う	2.8%
どちらでもない	15.9%
答えない、その他	12.2%

第二表・帰還についてあなたの気持ち

住民の意向をくんでいる	21%
意向は無視されている	71%
答えない・その他	8%

後期高齢者・医療費窓口負担

増率を警戒する!!

昔の仲間が集まると必ず出てくる話題は、病名と医院名そして薬の話になる。さらにこの会話は年齢を重ねるに比例して多くなる。

そこで気になるのが医療費である。

今年の7月に参議院通常選挙がある。また永田町においては、総選挙とのダブル選挙もささやかれ始めている。「森友・加計」そして「統計不正」などの根はすべて一つであり何も解決していない。にもかかわらずマスコミ各社の世論調査は、その設問と回答の違いはあれ、総じて安倍内閣に対する疑惑と不信を示すものとなっている。しかし、内閣支持率は高止まりを続けている。この動きをどう見るか。ただ単に「安倍内閣の一強支配」と「野党の弱体」と言う言葉で片づけて良いのだろうか。

安倍首相と自民党は内閣の支持率を確実なものとし、そこにへばりつく公明党や日本維新などは議席の拡大をもくろむものとなっている。また「9条の改憲」をはじめ、災害発生時などの非常事態に際し、首相の権限を集中させる「緊急事態条項」の新設などをあきらめられたわけではない。そのことが二階幹事長や加藤総務会長の口から「安倍内閣四選もあり得る」という発言が飛び出してくる所以である。それは明らかに「改憲の下地をつくるもの」であることは間違いない。

参議院選が終われば再び顔を出すのか

「ここに冒頭の医療費を重ねて考えてみたい。」

医療機関の窓口で支払う医療費の自己負担率は、現役世代及び69歳までは3割、70〜74歳は2割、75歳以上は1割となっている。

但し現役並みの収入の場合は3割である。

そこで2018年4月18日の毎日新聞の次の記事を取り上げたい。「75歳以上の高齢者が医療機関の窓口で支払う医療費の自己負担を2割に引き上げる財務省案について、自民党の財政再建に関する特命委員会(委員長・岸田文雄政調会長)は、引き上げ導入の先送りの検討に入ったと称しながらも、団塊世代が後期高齢者入りする(2022年)までに結論を得るとの記述を残している」。それは党厚生労働族議員らの反発があったことと、本年七月の参院選を意識し、高い投票率を示す「高齢者層の反発」を恐れたことであり、選挙が終れば、時期を見て再び増率案が出てくることをきちんととらえたいと思う。

僅か23パーセントの支持で成り立つ自民党

現に財務省は75歳以上についての自己負担を2割に引き上げる提案をあきらめていない。

安倍政権の一強支配と言え、その議席数は得票率わずか23%の支持によって成り立っている。強がりを露出する安倍首相も「薄氷を踏む思い」であることは間違いない。そうであるなら、反自民の戦いは高齢者層への働きかけを強めることであり、その一つに「医療費、介護費負担」の削減と負担増率の反対が課題となる。但し、それはスローガンを述べるだけでは不十分である。具体的な例

示を持って、高齢者の理解が得られる言葉で働きかける必要があるであろう。

そこで「高齢者優遇の政策の是正」、「全世帯型の社会保障」という政策を取り上げたい。

保育所の保育料無償化を考えてみよう

次の一例を取り上げたいと思う。認可保育所の無償化である。政府は保護者の収入にかかわらず幼児教育や保育の機会を保障する仕組みだと強調する。その試算によると、認可保育所の無償化には全体で年間4460億円を必要とする。それを所得階層別の配分額で見ると、年収約260万円までの非課税世帯には計50億円(全体の1%)、330万円までには計170億円(4%)。470万円を超え約640万円までの世帯には計1520億円(33%)、640万円を超える世帯に計2320億円(50%)である。年収640万円以上の親には我慢をしないでいただく、また我慢をしていただけの年収ではないだろうか。その指摘が低所得者の我儘と言えるだろうか。(東京新聞12月21日)

もちろんそれだけではない。安倍内閣は米国の武器輸出制度である「対外有償軍事援助(FMS)」に基づく高額な武器の購入を大幅に増やしている。2019年度予算案では契約ベースで過去最大の7013億円と10年前に比べ10倍以上に膨張であり、2019年度予算案の防衛費を過去最大に押し上げる要因となった。さらに米軍駐留費の負担増もある。高額所得者優遇あるいは大企業の内部留保金に対する課税策も波及をされて良い。これらの指摘も忘れることができない。

【視点・論点】

現憲法は「子どもの服」か？

「憲法を改正しよう」という「改憲ソング」が2月に発売された。この「原案」と歌を担当したのは自民党政務調査会の前審議役であり、安全保障政策や憲法問題に取り組んできた田村重信氏（66）である。歌のタイトルは「憲法なんてただの道具さ」。そして「これは個人の作品であり、自民党とは無関係だ」と強調しながらも、自民党職員によつて広められようとしている。調べはフオーク調であり、かつての歌声喫茶で若者が歌った「ソング」と変わらない。そこでその歌詞を紹介する。

♪ 憲法なんてただの道具さ ♪

ゆずれない想いの胸に抱いて

愛する人を守つていこう

いつまでも同じ服は着られない

大人になつたらもう着替えよう

辛いことから目をそらしたままで

生きてくのは臆病だから

憲法なんてただの道具さ 変わることに

恐れなくて 明日のために

憲法よりも大事なものは僕たちが

毎日幸せに安全に暮らすことさ

誰かの助けを待つんじゃない

自分の力で立ち上がろう

憲法なんてただの道具さ 変わることに

恐れなくて 未来のために

憲法よりも大事なものは

僕たちが毎日を幸せに

安全に笑顔で暮らすことさ

今般の「改憲ソング」は改憲を声高に叫んではない。全体的に抽象的な内容となっている。では「毎日を幸せに暮らすことが『憲法』より大事だ」と言つ。それは現行の「憲法」のもとでは「幸せに、安全に暮らせない」というのか。また「大人になつたら着替えよう」と言つ。しかし、「どのような服に着替えよう」とするのが無い。

さて、憲法改正の国民投票が発議をされたときを考えてみよう。「改憲と護憲」の激しい論争が展開される。その時、人気歌手によつて「憲法なんてただの道具さ」が電波を通して全国に流される。あるいは「AKB総選挙」のような舞台がつくられたとする。原案を作つた田村氏は述べている。「憲法に興味のない人や改憲に反対の人たちに届くように、聞きやすいものにしたかった」と。ここに「苦い薬もオブラートに包み飲みやすくする」という意図を見抜く必要がある。「鎧の陰に牙を隠す」という巧みな「政治的扇動」の役割を今からしっかりと受け止めその対策をする必要があると思う。

もう一つの老後の生活を考える知恵

「岡山県赤磐市で昨年1月、多重事故に巻き込まれた小学4年の女児が死亡した事故は1年を迎える。事故の発端は高齢ドライバーがアクセルとブレーキを踏み間違えたことであつた。女児の父親が毎日新聞の取材に応じ『高齢ドライバーによる事故がなくなるよう、対策を考えてほしい』

と再発防止を訴えた」（毎日新聞1月27日の要約）

今も高齢者の運転ミスによる事故は後を絶たない。多くの地域では公共交通が充実しておらずマイカーが高齢者の生活を支えとなっている。運転に不安があれば、免許を返納すべきとしても、その後の代替えの交通手段は不可欠である。

さらに運転履歴を持たない高齢者にとつて、同居の子どもたちの独立は、同時に「外出の足」は無くすることになるな。

近年「先進運転支援システム」が取り入れられ、カメラの搭載により検知・認識が行われるようになった。今後ますます高性能化が図られていくだろう。アクセルとブレーキペダルの踏み間違いによる痛ましい事故も防げるだろう。しかし、先進安全装備である誤発進抑制機能が装備されている車の買い替えが必要である。

同時に杖をついて、おぼつかない足取りで車の運転席に乗り込む高齢者の姿を見ることがある。問題は次である。いずれはハンドルを握ることができなくなる時期が来る。それが何歳であるかはあるが車のない生活は残される。その時に外出を容易にするだけの脚力が残されているだろうか。自宅からバス停まで、そしてバスを待ち、さらに帰りもある。「可能な限り早い時期に車のない生活に切り替える必要」がある。これも高齢者の晩年を過ごす知恵の一つと思うが、どうだろうか。





◆安倍の顔と名前を聞けば身構え悪罵を投げつけた心境です。しかし、彼のやることなすことすべて裏目に出ている現状もじっくり見ておく必要があると思います。

◆3月定例会市議会の開会中、私はキャッシュレス社会について一般質問をします。とても参考になりました。おつしやる通りだと思えます。毎号、読ませていただくのを楽しみにしています。

◆タイムリーな話題をわかりやすく伝えてくださりありがとうございます。辺野古新基地反対の民意が示されても一日も工事をとめない、安倍政権の厚顔ぶりにはほとほと呆れ果てました。憲法改悪ということもありえます。トップの記事は心に留めたいと思えました。

◆小泉政権の時代にはワンフレーズポリティクスなるもので、物事を単純化、二元化してしまい「言葉を壊した」と感じたのですが、安倍政権では「議論すら壊してしまった」と感じています。相手の言うことには全く聞く耳を持たず自説だけを強弁し続ける姿勢と、それを許してしまっている現状には暗澹たる気分になせられます。

◆消費税導入に伴う軽減税率やポイント還元の仕事組みがわかりやすく説明され。まさにいいタイミングで紹介なさっていました。もともと、財政健全化、景気への打撃回避、キャッシュレス化の促進という三つの狙いを同時に追っているため、何のための増税かがわからなくなり、システムそのものが

どうしようもなく複雑になってしまった。そうわかっても、誰もとめられない、というのが現状ではないでしょうか。

◆連日、新人女性市議を抱えて選挙一色です。気が回っていないくて、あれもこれも遅れ気味、かつてのようにスムーズにいきません。とにかく、戸別チラシ配布、街宣を連日行い、何とか元市議の復帰とあわせ2議席確保、4月においしいお酒を飲みたいと思っています。地道に自分の住む町から変えていくしかないと言いつつ聞かせています。

コーヒータイム



弟に体罰を加える母親の姿を拡散した長男

親の子どもに対する体罰、虐待、そして死に至らしめる事件が頻発している。これを受けて政府は2000年11月に施行された児童虐待防止法の改正に取り組みとなっているが、親の子どもにたいする体罰の定義は難しい。まず世の親が子どもに手を挙げたことがないと言ったらウソになる。食事を取り上げられ家から出されたことは誰もが経験をしている。しかし、親は「どこまでが許容範囲なのか」を知っていた。また隣のおじさんが代わって謝ってくれた近所の人間関係もあった。一般

の法の改正と世間の動きに対し一つの懸念をもった。それが「6歳の息子の体を何度もけるなど虐待を加えた母親の姿を動画にして長男がツイッターで拡散した」という事件である。通報を受けた警察が、動画の投稿者を特定し母親を6歳の次

男を虐待した疑いで逮捕した。詳細はわからないが拡散したのは中学一年の長男である。腕力からしても母親の腕を抑えて弟への体罰を防ぐくらいのは力はあるだろう。そして弟をかばうこともできたであろう。しかし、そのようなことをしなかったばかりか、母親と弟の姿を動画にして拡散するという行為をどのように考えたらよいのだろうか。

次男にけがはなく、現在は児童相談所が中学一年の長男とともに保護しているという。管轄する児童相談所などによると、去年4月にもこの母親が、長男を虐待している疑いがあるという連絡が警察を通じて寄せられたということ。その恨みを「動画」と言うことで晴らそうとしたのか。もはや「家族破壊」であり元に戻ることができない。悲しいことである。

母親を食い尽くして成虫になるハサミムシ

ハサミムシ類は産卵した雌だけが卵を保護する。ですから、ハサミムシ類の社会性は母子の関係として成立しています。その一種であるコブハサミムシは一回しか産卵しない。そして孵化するまで、母虫は卵をなめたり、卵塊を積み替えたりして、微生物の感染を防ぎ捕食者から卵を守る。やがて孵化した幼虫は母親に食いつき、食い尽くした後産卵されていた場所を離れて単独生活に入る。人間からすれば「凄惨」な社会に見える。しかし、自然から教わるものがあることは間違いない。

